天狗もどきの日常

けんちんじる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

妖怪の山在住の逸般人こと主人公、野分風香（のわきふうか）の笑いあり異変ありの日常

目次

第1話 …… 1

第1話

妖怪の山。それは現世から隔離された人外たちの楽園、幻想郷に唯一ある、河童や天狗など多くの妖怪たちの住処となっている山だ。そんな妖怪の山にある一人の人間の少女がいた。

「文さ～ん、はたてさ～ん、こっちこっち～！おいてっちゃいますよ～！」
「は～いわかったからちょっと待って～！」
「相変わらずこの二人はテンション高いわねぇ」
やっほー画面の前のみなさんこんにちは！妖怪の山在住の人間こと野分風香（のわきふうか）だよー！
今日は文とはたてと私の3人で山の紅葉を見に行こうということで朝早くから山を一周して帰ってきたところだよー。だからこんなにテンションが高いんですね～。
いや～にしても毎度思うけどやっぱり秋の山の景色はいいですなぁ～
「いや～毎度思うけどやっぱり秋の山の景色はいいですなぁ～」

「声に出てるわよ」
「あ、えへへ」
　これは失敬、どうやら思っていたことが声に出てしまったようだ。
「それにしてもこんな形で3人でいれるなんて思ってもみなかったですねぇ」
「本当そうよねぇ」
　そうなのだ。じつは私は人間ということで本来ならばこんなところには普通来れないのだ。
　しかもここはあの天狗たちの住処なので余計に。
　しかしながら私にはそれ相応の理由と功績があるので、特別に山に自由に立ち入ることが許されているのだ。
　そして今回の紅葉狩りは許可されたことで初めてこの天狗の友人たちと共に心置きなく自由に山を一周できるということで終始テンションが高かったのだ。
「ねぇねぇこの後どうする？一緒に弾幕ごっこでもする？」
「うーん、したい…と言いたいところなんだけど、私この後新聞作りしないといけないのよねぇ。だから無理かなぁ」
「じゃあはたては？」
「私もこの後新聞作んなきゃいけないから無理よ」

「そっかぁ。じゃあ楽しかったけど今日はここまでか…」
「そうね」
　残念ながら今日はここまでらしい。
「そう気落ちしないでよ。せっかく上に認められてるんだし明日もまた会えるから。」
「そうよ。元気のないあなたなんて見たくないもの」
　励まされちゃった。えへへ。
「それもそうね。じゃあまたね―！」
「またね―！」
「またね―！」
　ふぅ楽しかった。じゃあ今日はもう帰ろっかな。

　ちなみにその後、家に帰る途中でツンデレ白狼天狗犬走椛に会ったので、今日のことを話してみると、「あぁ～いいなぁ～私も行きたかったなぁ～」と言ってきて優越感を感じたのはここだけの話。

「さぁて無事家に帰ってきたし、昼の修練でもするかぁ～」

と言って風香は裏庭に出て霊力を練り、縦横無尽に空を〝駆け〟始めた。
そう、実は彼女、幻想郷でも数少ない強力な霊力の持ち主で、それを先祖代々受け継ぐ〝忍術〟に転化して攻撃したり守ったりしたりできるのである。
そのため彼女は、家ではよくこのように霊力を使いながら修練したり生活したりしている。
「よーしこのまま、あれ、やっちゃいますか！」
しばらくすると、風香はおもむろにふところにしまってあった手裏剣を取り出し、言った。
「風遁『天狗もどき』！」
その瞬間、〝裏庭では全く吹いていないはずの風〟が強烈に吹き荒れ、妖力を吸って丈夫なはずの木々が今にも倒れそうになった。
「ふぅ～気持ちいい～。やっぱこれが一番いいわぁ～」
風香は強力な陰陽術の使い手で色んな属性の術を使えるが、その生い立ちから、風属性のものが一番強力で、お気に入りでもあるのだ。
その後も何度か忍術をしたところで、おやつを食べようか家の中へ戻ろうかというところで風香はは驚きで立ち尽くした。それもそのはず…

山の頂上にでっかい神社がいきなり現れたからである。